

メトニミーの言語処理プロセスについての分析

——動詞を中心とした語のタイプ・シフト——

大月 敦子

キーワード：メトニミー 生成語彙 クオリア タイプシフト タイプ強要

0. はじめに

メトニミー（換喩）は、ある事物をそれと関係の深い別の事物に置き換えて言い表す比喩法である。この置き換えという参照機能が、ターゲットとなる語の意味を敢えて間接的に示し、意味的効果を高めている。このメトニミーについては、古くは修辞表現として、近年では人間の認知能力を背景とした言語現象として議論されている。本研究の主目的は、このメトニミーの言語処理プロセスを解明することにある。

メトニミーを言語学の視点から議論する試みは、近年、Lakoff & Johnson (1980)の認知言語学的議論から、Pustejovsky, J (1991)の生成語彙(Generative Lexicon)へと、より明示的な議論へと展開してきている。本稿では、これらの展開を踏襲しつつ、メトニミーの言語処理プロセスのについて更なる議論と理解を提供することを目的としている。

その方法として、英語映画のシナリオ・コーパスからメトニミー表現を集め、生成語彙の枠組みにおいて、意味部門であるクオリア (Qualia) 構造の分析を行った。その結果、メトニミーの言語処理プロセスの背景には、動詞を中心とした語のタイプ・シフト (Type Shift) が関わっているという、興味深い結果を得るに至った。本稿では、この分析結果を報告すると共に、更なる議論の可能性を探る。

先ず第1章では、メトニミーが参照機能を持った人間の基本的な認知能力であることを紹介しながら、検討すべき問題点を示し、その言語研究の意義と目標を述べる。第2章では、本研究の分析に用いる生成語彙論について、その理論的枠組みを説明すると共に、本研究へ応用する理論的根拠を述べたい。第3章では、具体的な分析データを紹介し、その分析結果を報告する。第4章では、第3章での分析について考察を行い、最後のまとめと今後の課題の中で、メトニミーの包括的研究の道を開く議論の可能性を示す。

1. メトニミー

1. 1 参照機能

修辞技法の1つメトニミー（換喩）は、ある物を言い表す時に、その物の属性や、それに関連する物で言い換えることによって、(1)a. の例文のような効果的で説得力のある表現を作り上げている。例えば「貨物列車の音」を、(1)b. のように直接的に The sound of the freight と述べる代わりに(1)a. のように The freight と述べて貨物列車の音を聞き手に間接的に伝える。この間接的な伝達手法のメリットは、ターゲットの意味を聞き手の想像に委ねているところにある。しかしだからと言って、ターゲットの意味が間違っ て聞き手に伝わることはなく、逆に話し手と聞き手の暗黙の了解によってより説得力を持ち、想像の世界と相まって修辞効果を上げている。

- (1) a. “The freight woke up the other guys” (“Stand by Me”: 1986. Columbia Pictures)
b. The sound of the freight woke up the other guys

またメトニミーはメタファー（類似性の比喩）と並んで生産的であり、自然言語の語の意味拡張・意味変化・多義の説明にも大いに貢献している。例えば dish について考えてみると、(2)a. は“食器の皿”、(2)b. は“食器に盛られている料理”とそれぞれ名詞として、(2)c. は“料理を盛る”の動詞として使われている。本来の「皿」という名詞の意味が、その近接する「料理」や機能としての「盛る」の意味を持つ。言葉遊びのようではあるが、それによって語の生産性を上げている。

- (2) a. Could you wash up the dishes?
b. Please enjoy the dishes.
c. Shall I dish out potatoes?

次に、メトニミーが人間の基本的な認知能力に基づいていることについて述べる。例えば(3)a. “John began the book.” の解釈は、began と the book の間の意味的整合性を満たすためには、例文(1)(2)と比べると推論と文脈がより要求されなければならない。なぜなら begin は動作を表すものを目的語とするのが一般的であるためである。しかし実際には、the book を目的語とした(3)b. の *John began to read the book.* の解釈は容易に得られてしまう。この背景には、メトニミー的参照機能が作用している (Pustejovsky (1991))。本来は意味的に不整合であるはずの文までも瞬時に解釈可能にしてしまう。このことから、メトニミーが比喩としての修辞機能に留まらず、人間のより基本的な認知レベルで機能していることが分かる。

- (3) a. “John began the book.” (Pustejovsky (1991))
b. *John began to read the book.*

1. 2 “Ambiguity or Disambiguity”

メトニミーによって表現される語の意味は、本来は曖昧(Ambiguous)なものである。例えば(4)の salmon は、‘生きた生の鮭’なのか‘料理された鮭’なのか、本来は曖昧なはずである。ところがここでは、特別な文脈が与えられない限り、‘料理された鮭’が当然として選ばれる。つまり、参照する物が曖昧であるはずなのに、実際には迷いを与えることなく(非曖昧: Disambiguous) ターゲットの意味が選ばれる(Asher & Lascarides (1995))。

(4) He ate salmon. (Asher & Lascarides (1995))

同じことが動詞にも見られる。例えば動詞 bake は、(5)と(6)の文が示すように、本来は‘a change-of-state’と‘a creative act’の間で曖昧である。ところが(5)の文では‘a change-of-state’が、(6)の文では‘a creative act’の意味が迷うことなく選択される。

(5) John baked a potato. (Atkins, Kegl, and Levin (1988))

(6) John baked a cake. (ibid)

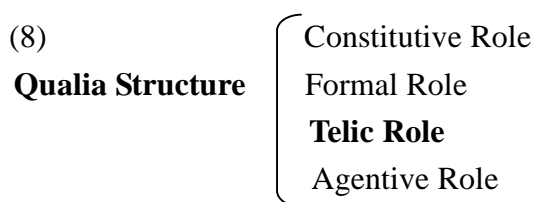
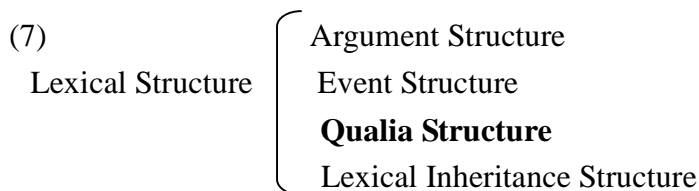
このようにメトニミーの参照機能によって表わされる語の意味は、本来は曖昧であるにも拘わらず、確実に非曖昧となる。この参照を、1. 1で述べたように、人が基本的な認知レベルで行っているとしたら、いったいどのようなメカニズムが背景となっているのか。本稿ではこのメカニズム解明のために、Pustejovsky (1991)が提案する生成語彙論 (the Generative Lexicon) を使って実際にメトニミー表現を分析し議論する。

2. 生成語彙論 (the Generative Lexicon: GL)

2. 1 Qualia Structure

生成語彙論は語の統語と意味を計算的に算出する理論的枠組みとして、特に語の意味分析において、より現実的な議論を提供している。その特筆すべきは Qualia Structure にある。Pustejovsky (1991) は、Qualia Structure は語の多義の曖昧性を説明するのに有効であると述べている。Qualia Structure は、Lexical Structure (7) の Argument Structure、Event Structure、Inheritance Structure と同一レベルにあり、語 (名詞) の意味を構造的に記述する。更にこの Qualia Structure (8) は、Constitutive Role (構成役割)、Formal Role (形式役割)、Telic Role (目的役割)、Agentive Role (主体役割) に下位分類される。その中で Telic Role は、名詞の目的・

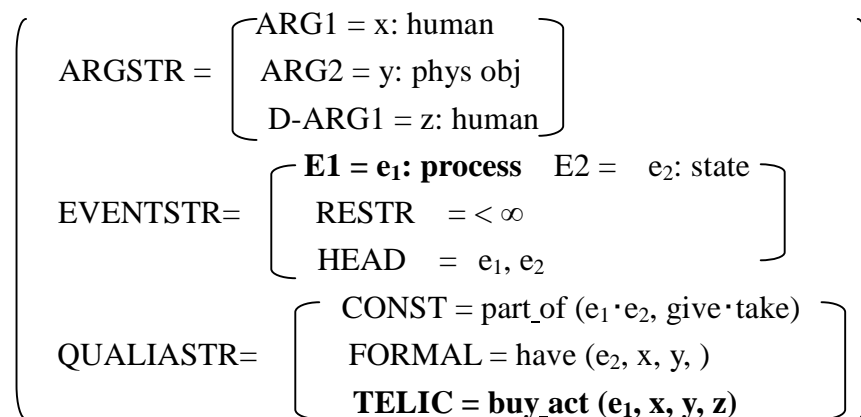
機能を語の属性として記述する。この Telic Role を設定することによって、語の意味記述を、これまでよりも現実的なものとし、また、生成語彙論を特徴付けている理論的優位性であるとも言える。



例えば名詞 purchase について考えてみる。(9) a. が buying の EVENT を意味するのに対して、(9) b は OBJECT を意味する。この両者での曖昧性の解消の説明として、(10) で示すように (9) a の EVENTSTR の e1:process によって、(9) b は TELIC によって記述される。

- (9) a. The government prohibits the purchase of illegal drugs. (Pustejovsky (1995))
 b. The purchases I made today are in the back of the truck. (ibid.)

(10)Purchase



2. 2 タイプ強要 (Type Coercion)

タイプ強要 (Pustejovsky 1995) は、メトニミーの曖昧性の背景には語と語のタイプ・エラーがあると考え、そのタイプ・エラーを解消するためのオペレーションとして提案されている。例えば例文 (11) において、begin は本来 EVENT を目的語 (ARG2 = e₂)

として取るところであるが、ここでは OBJECT を目的語としているために曖昧となるはずである。ところが book の TELIC に read(e, w, x, y) があり、これを引数としてタイプ強要のオペレーションが行われ、曖昧性が解消されると考える。メトニミーのような語の意味の曖昧性を説明するのに有効な理論である。

(11) John began the book.

(ibid.)

(12)

<p>begin</p> $\left(\begin{array}{l} \text{EVENTSTR} = \left[\begin{array}{l} E_1 = \text{transition} \\ E_2 = \text{transition} \\ \text{RESTR} = < 0 \square \end{array} \right] \\ \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG1} = x: \text{human} \\ \text{ARG2} = e_2 \end{array} \right] \\ \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL} = P(e_2, x) \\ \text{AGENTIVE} = \text{begin_act}(e_1, x, e_2) \end{array} \right] \end{array} \right)$	<p>book</p> $\left(\begin{array}{l} \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG1} = x: \text{info} \\ \text{ARG2} = y: \text{physobj} \end{array} \right] \\ \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL} = \text{hold}(y, x) \\ \text{TELIC} = \text{read}(e, w, x, y) \\ \text{AGENT} = \text{write}(e', v, x, y) \end{array} \right] \end{array} \right)$
---	--

2. 3 “Linking Model of Metonymic Concepts and Qualia Structures

本研究に生成語彙論を用いる最大の理由は、先に本研究が生成語彙分析を行い提案した “Linking Model of Metonymic Concepts and Qualia Structures” (Otsuki, 2001) にある。Lakoff (1987) は認知言語学の立場から、“Idealized Cognitive Models” によってメトニミーの概念を分類し、それぞれを “部分と全体 (THE PART FOR THE WHOLE)” “容器と中身 (THE CONTAINER FOR THE CONTENT)” “製作者と作品 (THE PRODUCER OF PRODUCT)” “物と使用者 (THE OBJECT USED USER)” “場所と出来事 (THE PLACE FOR THE EVENT)” とに分類し概念化している。この分類に対して Otsuki (2001) は、生成語彙の枠組みで議論し、Lakoff が提案する Metonymic Concepts の分類の背景には、Qualia Structures の 4 つの下位 ROLE による動機付けがあると、(13) を提案している。

(13) “Linking Model of Metonymic Concepts and Qualia Structures” (Otsuki,2001)

<u>Metonymic Concepts</u>	<u>Qualia Structures (ROLE)</u>
THE PART FOR THE WHOLE	CONSTITUTIVE
THE CONTAINER FOR THE CONTENT	TELIC
THE PRODUCER OF PRODUCT	AGENTIVE
THE OBJECT USED BY USER	AGENTIVE
THE PLACE FOR THE EVENT	SUBTYPE- TELIC

この Otsuki の提案は、本稿第 1 章で述べているように、メトニミーの参照機能が人のより基本的な認知機能であると仮定した場合、Lakoff が考える“部分と全体”“容器と中身”のような Metonymic Concepts を形成するための、より原始的な認知メカニズムが働いているに違いないと考えたからである。そして生成語彙論での分析の結果、(13)が示すように、Metonymic Concepts に対応する Qualia Structures を示すことが出来た。このことから、本研究は生成語彙の妥当性を認め、本稿での以下の分析に用いている。

3. 分析

分析のためのデータは、英語映画シナリオのコーパス(『Shrek』2001『Six Sense』1999『Stand by Me』1986『Mona Liza Smile』2003)を用い、総数 88 のメトニミー表現について分析を行った。メトニミーの曖昧性を作り出すタイプ・エラーに対して、タイプ強要オペレーションを想定し、88 個のメトニミー例文に対してそれぞれ生成語彙の枠組みで分析を行った。その結果、以下の Linking Models of Metonymic Type Coercion を得ることができた。そして 88 個の例文の総てが、7 つのいずれかのモデルに集約されることが分かった。

3. 1 Linking Models Between Lexicon and Pragmatics

88 個の例文を生成語彙の枠組みで分析した結果、タイプ強要のオペレーションは(14)に示されるようなバリエーションが観察され、メトニミーの曖昧性を解消するためのタイプ強要のパターンを表す 7 つのモデルが示された。矢印はタイプ強要オペレーションが行われていることを示す。

(14) LINKING MODELS OF METONYMIC TYPE-COERCION

<u>Linking Model of Type-Coercion</u>	* Coercing Operation ** P.V.	<u>Metonymic Expressions</u>	<u>Movie</u>
(I)		** “Let me catch my breath.”	[SbyM] ¹
(II)		“Ate a big picnic in the park	[SS] ²
(III)		“The freight woke up the other guys,”	[SbyM]
(IV)		“Her words met ice cold stares.”	[SS]
(V)		“I have drugs in my system twenty-four hours a day...”	[SS]
(VI)		“My father stormed the beach at Normandy.”	[SS]
(VII)		“My nose is running.”	[SS]

(14)に示されたモデルから、メトニミー表現のタイプエラーの解消には述語動詞 (Predicate Verb: P.V.) を中心としたタイプ強要オペレーションが重要な役割を担っていることがわかる。モデル(I)は目的語から P.V. へのタイプ強要、モデル (II) は P.V. から目的語へのタイプ強要、モデル (III) は P.V. から主語への、モデル (IV) は P.V. から目的語と主語の双方へ、モデル (V) は目的語と副詞句の双方から P.V. へ、モデル (VI) は目的語と文脈から P.V. へ、そしてモデル (VII) は主語と述語動詞との双方向からのタイプ強要が観察された。これに対して Pustejovsky は、タイプ強要は名詞の QUALIA 構造においてタイプ強要のオペレーションが可能となると考えている。しかし(14)の事実から、タイプ強要は Pustejovsky が考えている以上に柔軟に行われている可能性があると考えられる。

3. 2 QUALIA 構造とタイプ強要分析 I.

上記リンク・モデルを得るに至る詳細な分析例が、モデル毎に以下(13)に示される。意味が曖昧になるということは、言い換えればタイプ間に不整合が生じていることであり、その不整合を正そうとして整合する語彙情報を探す。その際に恐らく人は、かなりの柔軟性を持って、語用論、ディスコースレベルまで範囲を広げて整合す

るタイプを見つけ出そうとしていることが、以下の分析例からわかる。そしてどの部分に対してタイプ強要が行われているのか、(13)の分析例はそれらの違いもまた示している。

(15) Model (I): “Let me **catch my breath.**” [SbyM]

(16) catch

$$\left(\begin{array}{l} \text{EVENTSTR} = \left(\begin{array}{l} E_1 = \text{transition} \\ E_2 = \text{state} \\ \text{RESTR} = < 0_{\square} \end{array} \right) \\ \text{ARGSTR} = \left(\begin{array}{l} \text{ARG1} = x: \text{human} \\ \text{ARG2} = \text{physobj} \end{array} \right) \\ \text{FORMAL} = P(e_2, x) \\ \text{QUALIA} = \text{AGENTIVE} = \text{catch_act}(e_1, x, e_2) \end{array} \right)$$

breath

$$\left(\begin{array}{l} \text{QUALIA} = \left(\begin{array}{l} \text{CONST} = \text{air} \\ \text{FORMAL} = \text{life,} \\ \text{part of body} \\ \text{TELIC} = \text{live} \\ \text{AGENT} = \text{breath} \end{array} \right) \end{array} \right)$$

Model (I) では、動詞の catch が physobj (物体) を目的語に取るため、目的語 breath の一般的な意味ではタイプ・エラーが生じ、意味が曖昧になる。そのため breath の FORMAL ROLE から physobj となる part of body に整合性を求め、非曖昧性を獲得すると考える。つまり、目的語から述語動詞へのタイプ強要のオペレーションが行われていると考える。

(17) Model (II): “Ate **a big picnic** in the park with lots of chocolate mousse pie.” [SS]

(18) eat

$$\left(\begin{array}{l} \text{EVENTSTR} = \left(\begin{array}{l} E_1 = \text{transition} \\ E_2 = \text{process} \\ \text{RESTR} = < 0_{\square} \end{array} \right) \\ \text{ARGSTR} = \left(\begin{array}{l} \text{ARG1} = x: \text{animate} \\ \text{ARG2} = \text{physobj} \end{array} \right) \\ \text{QUALIA} = \left(\begin{array}{l} \text{FORMAL} = \text{act}(e_2, x) \\ \text{AGENTIVE} = \text{eat_act} \\ (e_1, x, e_2) \end{array} \right) \end{array} \right)$$

picnic

$$\left(\begin{array}{l} \text{QUALIA} = \left(\begin{array}{l} \text{CONST} = \text{food, drink,} \\ \text{walking} \\ \text{FORMAL} = \text{leasure,} \\ \text{TELIC} = \text{enjoy, relax} \\ \text{AGENT} = \text{have, go} \end{array} \right) \end{array} \right)$$

Model (II) は、動詞 eat が ARG2 = physobj で示すように、目的語 picnic の一般的な意味ではタイプ・エラーが生じ、意味が曖昧になる。そのため picnic の CONST=food, drink にタイプの整合性を求め曖昧性を解消している。つまり、述語動詞から目的語へのタイプ強要オペレーションが行われていると考える。

(19) Model(III): “**The freight** **woke up** the other guys,”

[SbyM]

(20) **freight**

$$\left[\begin{array}{l} \text{EVENTSTR} = \left[\begin{array}{l} E_1 = \text{transition} \\ E_2 = \text{state} \\ \text{RESTR} = < 0 \square \end{array} \right] \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG1} = x: \text{human} \\ \text{ARG2} = \text{physobj} \end{array} \right] \\ \text{CONST} = \text{train, container,} \\ \quad \quad \quad \underline{\text{sound of clatter}} \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL} = \text{carriage} \\ \text{AGENTIVE} = \text{carry} \end{array} \right] \end{array} \right]$$

wake up

$$\left[\begin{array}{l} \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \underline{\text{ARG1} = x: \text{sound}} \\ \text{ARG2} = x: \text{animate} \end{array} \right] \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL} = \text{life,} \\ \text{TELIC} = \text{live} \\ \text{AGENT} = \text{breath} \end{array} \right] \end{array} \right]$$

Model (III) は、動詞句 wake up が ARGSTR= ARG1= x: sound であるため freight ではタイプ・エラーが生じ、意味が曖昧になる。そのため freight の CONST= sound of clatter にタイプの整合性を求めタイプ強要の操作を行い曖昧性を解消する。つまり述語動詞から主語へのタイプ強要が行われていると考える。

(21) Model (IV): “**Her words** **met** **ice cold stares.**”

[SS]

(22) **word**

$$\left[\begin{array}{l} \text{CONST} = \text{letters,} \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL} = \underline{\text{human}} \\ \text{RESTR} = < 0 \square \end{array} \right] \end{array} \right]$$

meet

$$\left[\begin{array}{l} \text{EVENTSTR} = \left[\begin{array}{l} E_1 = \text{process} \\ E_2 = \text{state} \end{array} \right] \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG1} = x: \text{human} \\ \text{ARG2} = \underline{\text{physobj, animate}} \end{array} \right] \end{array} \right]$$

Stare

$$\left[\begin{array}{l} \text{QUALIA} = \text{CONST} = \underline{\text{eye}} \\ \text{AGENTIVE} = \text{catch_act}(e_1, x, e_2) \end{array} \right]$$

Model (IV) は、動詞 meet が ARG1=x human で人を主語とし、目的語を ARG2=physobj, animate を取らなければならないためにタイプ・エラーが生じ、意味が曖昧になる。そのため word の FORMAL= human にタイプの整合性を求める。更に目的語とのタイプ・エラーに対しては、stare の CONST = eye にタイプ強要の操作が行われる。つまり、主語と目的語の双方へタイプ強要のオペレーションが行われていると考える。

(23) Model (V): “**I have** **drugs** **in my system** **twenty-four hours a day...**” [Six Sense]

(24) have	$\left(\begin{array}{l} \text{EVENTSTR} = \left[\begin{array}{l} E_1 = \text{transition} \\ E_2 = \text{state} \\ \text{RESTR} = < 0 \square \end{array} \right] \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG1} = x: \text{human} \\ \text{ARG2} = \text{physobj} \end{array} \right] \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL} = P(e_2, x) \\ \text{AGENTIVE} = \text{catch_act}(e_1, x, e_2) \end{array} \right] \end{array} \right)$	drug	$\left(\begin{array}{l} \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{CONST} = \text{medicine} \\ \text{FORMAL} = \text{tablet, powder} \\ \text{TELIC} = \text{ease disease,} \\ \text{AGENT} = \text{drink, take,} \end{array} \right] \\ \text{in my system} \\ \text{EVENTSTR} = e_1: \text{state} \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG1} = \text{phys obj} \\ \text{ARG2} = \text{the_system} \end{array} \right] \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL} = \text{at}(e_1) \\ \text{AGENTIVE} = \text{state}(e_1) \end{array} \right] \end{array} \right)$
------------------	---	-------------	--

Model (V) の目的語 drug には、QUALIA の AGENT に drink, take, の語彙情報がある。しかし have の ARGSTR= ARG2 = physobj によってタイプの不整合が生じる。そのため EVENTSTR = E₂ = state が引数となってタイプ変更が求められる。更にこのタイプ強要は、副詞句 in my system から have の EVENTSTR = E₂ = state へタイプ・強要が行われ、have が“服用している”という意味を獲得し曖昧性が解消される。つまり目的語と副詞句の双方からタイプ強要のオペレーションが行われると考える。

(25) Model(VI): “My father **stormed** **the beach** **at Normandy**.” [SbyM]

(26) storm	$\left(\begin{array}{l} \text{EVENTSTR} = \left[\begin{array}{l} E_1 = \text{transition} \\ E_2 = \text{state} \\ \text{RESTR} = < 0 \square \end{array} \right] \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG1} = x: \text{disaster, power} \\ \text{ARG2} = \text{fort, fortress} \end{array} \right] \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL} = P(e_2, x) \\ \text{AGENTIVE} = \text{catch_act}(e_1, x, e_2) \end{array} \right] \end{array} \right)$	beach	$\left(\begin{array}{l} \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{CONST} = \text{sea, coast, sand} \\ \text{FORMAL} = \text{site, white,} \\ \text{TELIC} = \text{bathe, fish,} \\ \text{leisure} \end{array} \right] \\ \text{at Normandy} \\ \text{EVENTSTR} = e_2 = < t, \alpha, \beta >, \text{process} \\ \text{Common Knowledge} \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{CONST} = \text{fort, fortress,} \\ \text{FORMAL} = \text{battle field} \end{array} \right] \end{array} \right)$
-------------------	--	--------------	--

Model (VI) の動詞 storm は、目的語を ARG2 = fort, fortress を取るため、QUALIA=FORMAL=site, を引数としてタイプ強要オペレーションを行い、更に at Normandy の EVENTSTR= e₂=<t, α, β>, process として Common Knowledge を想定し、そこに QUALIA の CONST= fort, fortress を引数とする。これによって storm とのタイプの整合性が保たれる。つまり目的語と Common Knowledge の副詞句の双方からタイプ

強要のオペレーション操作が行われると考える。これによって、語彙レベルとディスコース・レベルとの同一レベルでの議論が可能であることをも示している。

(27) Model (VII): “**My nose is running.**” [SS]

(28) **nose** **run**

$$\left[\begin{array}{l} \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{CONST} = \text{nose, } \underline{\text{mucus}} \\ \text{FORMAL} = \text{body, face} \\ \text{TELIC} = \text{breath,} \end{array} \right] \end{array} \right] \left[\text{ARGSTR} = \text{ARG1} = \underline{\text{animate, fluid}} \right]$$

Model (VII) の動詞 run は、主語を ARG1 = animate, fluid とする。一方、主語 nose は run を動詞とする語彙情報はない。つまり主語と動詞の双方にタイプ強要オペレーションの操作が行われなければならない。そこで nose の QUALIA = CONST = nose, mucus を引数とし、run との整合性が図られ、また他方、その QUALIA = CONST = nose, mucus と run の ARG1 = animate, fluid を引数として nose との整合性が図られる。つまりここでは、主語と動詞が互いに強要しあう共構成 (Co-composition) になっていると考える。

4. 考察

メトニミーの例文タイプ強要オペレーション分析について以下のように考察する。

1. 英語映画シナリオ・コーパスから得たメトニミー表現は、タイプ強要を介した7つのリンキング・モデル：(I) 目的語か P.V. へのタイプ強要 (II) P.V. から目的語へのタイプ強要 (III) P.V. から主語へのタイプ強要 (IV) P.V. から目的語と主語の双方へのタイプ強要 (V) は目的語と副詞句の双方から P.V. へのタイプ強要 (VI) 目的語と文脈から P.V. へのタイプ強要 (VII) は主語と述語動詞との相互的タイプ強要：によって、その生成プロセスが特徴付けられている。
2. メトニミーの生成において、語のタイプ・シフト・オペレーションである強要 (Coercion) は、述語動詞によって支配される。
3. それぞれのリンキング・モデルは QUALIA 構造内の4つの ROLE のバリエーションによって特徴付けられている。
4. リンキング・モデルを想定することによって、語彙、語用論、ディスコースを同じレベルで議論することが可能になる。
5. メトニミーが介在する語の生成は、本来ならば曖昧になるはずの語の意味が、非曖昧性を獲得するに至るメカニズムを明示的に示すことができた。

5. まとめ

メトニミーを介した語の生成メカニズムを明らかにするために、Otsuki (2001)において“Linking Model of Metonymic Concepts and Qualia Structures”を想定したことにより、本稿のLINKING MODELS OF METONYMIC TYPE-COERCIONを提案するに至った。この中で7つのリンクング・モデルを示すことによって、メトニミーの、曖昧性から曖昧性を獲得しながらターゲットを参照する機能の背景を議論することができた。更にこのリンクング・モデルを想定することによって、語彙と語用論、ディスコースを同一レベルで議論する場を提供することができた。この更なる展開によって、語彙と語用論、ディスコースについての議論が加速することが期待できる。

6. 課題

最後に、本メトニミー研究の語・語用論レベルから、シナリオの文体研究へと発展することで、メトニミーのより包括的な研究が可能になると考える。それによってメトニミー研究それ自体がより一層精査されるだろう。例えば、上記の分析を更に作品毎にまとめた(22)から、シナリオ毎の文体スタイルについての議論の可能性が示唆される。“Shrek” “Sixth Sense” “Stand by Me”はObject to PV、“Mona Liza Smile”はPV to Object/Subjectを中心としたタイプ強要によって特徴つけられていることが分かる。この議論の発展によって、メトニミーについてより包括的な議論が可能になると考える。メトニミーの参照機能が、人間の基本的な認知能力の一部であるとするならば、包括的な視野を持って議論することは大に行われるべきであり、そのことによってメトニミー研究の発展に貢献できると考える。

(29)

Movies	Shrek	Sixth Sense	Stand by Me	Mona Liza
Object to PV	19	7	7	3
PV to Object	2			12
PV to Subject	1		2	10
Subject to PV	3	1		2
Object & Adverb to PV	1	3	5	
Object & Context to PV		3	3	
Co-composition		1		3
Total	26	15	17	30

注

¹ SbyM: “Stand by Me”

² SS: “The Sixth Sense”

参考文献

- Asher, N & Lascarides, A. (1995). Lexical Disambiguation in a Discourse Context. *Journal of Semantics* 12: 69-108.
- Atkins, B.T., J. Kegl and B. Levin. (1988). Anatomy of a Verb Entry: From Linguistic Theory to Lexicographic Practice. *International Journal of Lexicography* 1: 84-126.
- Lakoff & Johnson (1980). *Metaphors We Live by*. Chicago, IL: University of Chicago Press.
- Matsumoto, Y. (1998). Imi to Keisan. *Iwanamikouza Gengonokagaku* 4. Iwanami Shoten: 157-163.
- Newell, M. (Director). (2003). *Mona Lisa Smile* [Motion picture]. United States: Revolution Studios Distribution Company, LLC
- Numberg, G. (1996.). Transfers of Meaning. *Lexical Semantics: The Problem of Polysemy*. Oxford. Clarendon Press: 109-132.
- Otsuki, A. (2001). Metonymy: Dynamism of Word Generation and Representation of the Complex System ~ A Role of Lexical Knowledge in Metonymic Concepts ~. *KLS* 21. Kansai Linguistic Society:
- Otsuki, A. (2002). Metonymy: “Sydney was a great success.”- Dynamism of Word Generation and Representation of the Complex System. *KLS* 22. Kansai Linguistic Society:
- Pustejovsky, J. (1991). The Generative Lexicon. *Computational Linguistics* vol. 17: 409-441
- Pustejovsky, J. (1995). *The Generative Lexicon*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Pustejovsky, J. (1996). The Problem of Lexical Ambiguity. *Lexical Semantics*. Oxford University Press: 1-14.
- Reiner, R. (Director). (1986). *Stand by Me* [Motion picture]. United States: Columbia Pictures Industries, Inc.
- Shyamalan, N. M.(Director). (1999). *The Six Sense* [Motion picture]. United States: Spyglass Entertainment Group L.P. & Hollywood Pictures.
- Steig, W & Elliott, T. (Directors). (2001). *Shrek* [Motion pictures]. United States: Dream Works LLC.
- Tukada, M. et al. (Ed.). (2004). *Mona Lisa Smile*. Nagoya: Screen Play.

(信州大学 全学教育機構 非常勤講師)
2010年1月12日受理 2010年2月8日採録決定